

沖縄の漁業カレンダー

嘉数清

—— 飛び魚のたしかなジャンプ海青し ——

池間中学3年、与那覇康隆君の俳句である。平成3年度全国学生俳句大会において、数万点の中から7点だけ選ばれる「特選」に輝いた作品だ。春の日ざしのなか、沖縄の青い大海原をバックに、大きな胸びれをピンと張って飛んだ、トビウオの姿がいかにも誇らしげで鮮やかだ。

沖縄の水産業もたしかなジャンプをしたいものである。

1. 概要

本稿では、沖縄の漁業や養殖業、漁獲物などの季節変化を簡単に月別に整理した。

沖縄ではいろいろな漁業や養殖業が営まれている。そのなかには、底魚一本釣り漁業や底はえ縄漁業のように周年あまり大きな変化をしないものもあるが、定置網漁業のように漁獲物の種類や量が季節によって大きく変化したり、トビイカ漁業のように漁期が限定されたりするものが多い。

近年は漁場汚染やとり過ぎなどにより漁業資源の減少がいちじるしく、漁業者のくらしも決して楽ではない。しかし漁業者は大自然を相手に、いくつかの漁業や養殖をくみ合わせて四季折りの生産活動を行い、自らの生活を営んでいる。

漁期や漁獲物の季節変化は、年や地域によってずれがあるが、ここではおおまかにまとめた。参考資料として主に水産試験場および水産業改良普及所の刊行物を用い、それに漁業者の話を加えた。一部は新聞記事も参考にした。

なお、本稿の一部はすでに「平成4年沖縄県のこよみ」（県広報課発行）に記載した。

1 月

★モズク養殖

イトモズクの収穫 1～2月

オキナワモズクの藻体採苗（藻体から養殖網に種付けすること）12～3月

沖縄のモズク養殖は年間1万トン以上のモズクを生産し、全国消費量の90%以上を供給している。

2種類のうち、オキナワモズクは奄美大島から西表島までの南西諸島だけに分布する特産海藻で、本県モズク養殖の主体となっており、多くの漁協で生産されている。イトモズクは形態的には本土産のモズクと同じと言われているが、生態的には本土産モズクが海藻（藻）だけに着生するのに対し、沖縄のイトモズクは着生基質を特に選ばない点で異なっている。オキナワモズクに比べて細く、収穫時期も早い。イトモズクの主産地は、平良、知念、与那城、恩納、宜野座、本

部、伊是名など。

平成4年のモズク養殖は、2月から3月にかけて曇りや雨の日が続いて日照量が不足し、また赤土汚染の影響が出たため、多くの漁協でイトモズク及びオキナワモズクの生長不良、品質低下などが生じ、大幅に収穫量が減ってしまった。



図1 漁協のセリ市場（名護漁協）

★チンシラー

和名はオーストラリアキチヌ。12～3月に中城湾の水深10～30mの砂泥域でチンシラーとチン（和名ミナミクロダイ）が底延縄漁業で漁獲される。盛漁期は1～2月。産卵期もこの時期である。主産地は知念、与那原、中城。

中城湾以外の地域では漁業者もチンとチンシラーを区別せず、チンの呼称だけの所が多い。釣り情報などでも両者は混同され、大型チンが釣れたという記事はチンシラーであることが多い。チンシラーはチンよりも大型に成長し、胸びれや腹びれが黄色くなる。

県栽培漁業センターでチンシラーの種苗生産が行われ、平成3年8月に中城湾で初めての種苗放流が行われた。一部地域では養殖も行われている。

★クブシミ

和名はコブシメ。漁期は10～3月。

コウイカ類中の最大種で、奄美以南のサンゴ礁海域に多い。産卵の盛期は12～3月。アナサングモドキなどの特定のサンゴ礁の隙間にピンポン球状の卵を産む。寿命は1～1.5年。高温期はイノー（礁池）を離れ、深みに入るようだ。

日裁協八重山事業場で種苗生産や放流、人工産卵床などの試験研究が行われている。

m前後の中層から釣り上げられる。盛漁期は3～5月。産卵盛期も3～5月。寿命は1年と見られているが、これには異論もある。

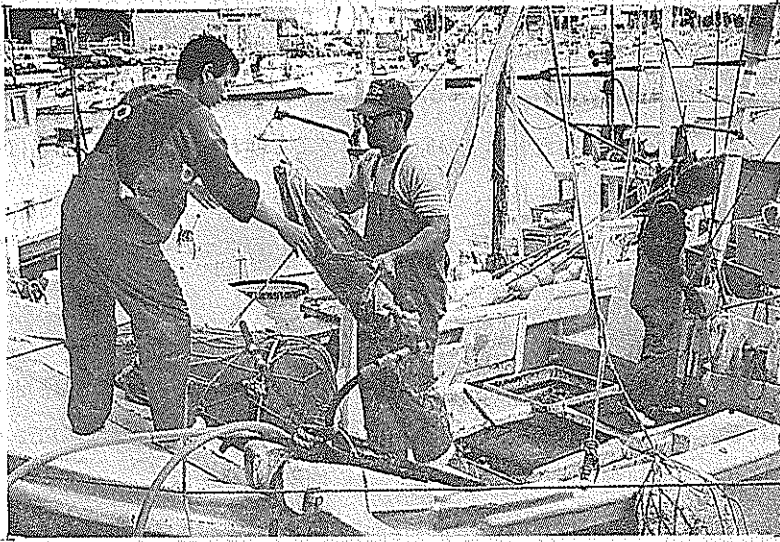


図2 セーイカの水揚げ（糸満漁協）

1989年11月、久米島漁協が兵庫県からソデイカ専用漁具を導入してセーイカ漁業を開始し、その後、各地で盛んになった。特に1990年はバヤオ漁業が不振のため、セーイカは漁業者の救世主的な存在となった。

現在ではとり過ぎによるセーイカ資源の枯渇が心配され、久米島漁協などいくつかの漁協で6月から10月まで自主禁漁にしている。しかしそれではセーイカ資源の保護と有効利用を図るためには不十分で、全局的に統一した禁漁期の設定が必要だという意見が漁業者のなかで強くなっている。

★ニングッチ・カジマーイ（2月風廻り）

旧暦2月、春の彼岸のころ（春分前後）、急に温帯低気圧が発達して進行したり、前線が通過したりするため風向きが急変し、海は大時化となることがたびたび起こる。注意が必要だ。

4 月

★イセエビ類の採捕禁止

旧暦4月1日～6月30日（沖縄県漁業調整規則第33条）

★浜下り（はまうり）

旧暦3月3日

春は昼間の潮が最も干く季節である。水はぬるみ、サンゴ礁が大きく姿を現す。各地で浜下りの習慣があるが、海には採取禁止の生物や漁業権の設定されている魚介類がいる。むやみに採取するのはやめたものだ。

県民の気持ちが海にむけられるこの日を、漁業者の側からもっと積極的に評価し、海を守り、魚介類を育てる、漁民の気持ちを県民にアピールする日にしたい、という考え方が最近になって出てきた。その初めての具体化として、平成4年4月5日（浜下りの日）に糸満市で第1回「浜下りフェスタ'92」が開催された。

★モズク養殖

オキナワモズクの収穫 3月下旬～6月
2～3月に早期収穫した若いオキナワモズクはやや細く、それを好む人も多いが、塩蔵に向かないため現在の流通には乗っていない。新鮮な早期モズクを大都会に空輸し、春を呼ぶ海の香りをおいしくキャッチフレーズにして売り出したらどうだろうか。
なお、イトモズクの収穫時期は前記のとおり1～2月が普通。

★カツオ一本釣り漁業

漁期 4～10月
本島北部の本部で4月頃から始まり、宮古では6月に始まる。生き餌としてミジユン（ミズン）、スルル（キビナゴ）、ウフミー（テンジクダイ）などを使用し、8月からはサネーラー（グルクン幼魚、タカサゴ）も用いられる。主産地は本部、伊良部、池間。
近年は一本釣り以外に、パヤオでの曳き縄漁業によるカツオの漁獲が多くなり、各地で盛んに水揚げされている。新鮮なカツオのおいしさは、刺身にしてもたたきにしても格別だ。

★パヤオ漁業

盛漁期 4～9月
パヤオ漁業は、沖合の水深1,000 m付近の海域に設置した浮魚礁（パヤオ）周辺で、主に曳き縄漁業として営まれる。1982年に宮古、八重山で始まり、1985年頃から県下各地で盛んになった。パヤオ漁業の漁獲量は4～5月に最も多く、その後は次第に減少し、10～2月は不漁期、3月からやや上向いてくる。



図3 パヤオでのカンパチ稚魚調査（本部漁協）

パヤオ漁獲物の比率をみると、シビ（10kg未満の小さいマグロ類、主にキハダ）が最も多く全体の約40%、キハダマグロ（10kg以上）20%、シイラ10%、カツオ10%、クロカジキ10%、その他10%となっている。

パヤオでの魚種ごとの漁期をみると、シビは周年漁獲され季節変動は少ないが、しいていえば沖縄で3～5月と7～9月にやや多く、宮古で2～5月と10～12月に多くなる。キハダマグロは沖縄では3月下旬から始まり4～5月に盛漁期となるが、6月から急減し漁業者を困らせる。9～10月にはややもち直すが、11月には終漁する。宮古のキハダマグロは6月頃から漁獲され、7～9月にピークとなり10月に終漁する。カツオは沖縄で3～9月、宮古で2～9月に漁獲される。シイラは沖縄、宮古とも4～6月にピークとなった後急減し、10～11月にややもち直す。クロカジキは沖縄では4～7月が漁期となるが、与那国では1～10月を漁期とし、盛漁期は3～8月。

★タマンの大集合（糸満）

3月下旬～5月中旬

喜屋武岬沖のウキン會根（水深40m）ではこの時期にタマン（和名ハマフエフキ）が産卵のため集まり、一本釣りや底延縄でたくさん漁獲される。

糸満漁協は資源保護のため4月中を自主禁漁にしていたが、よそからの潜水器漁業や底刺網漁業との調整ができず、残念ながら自主禁漁は4年間実施した後、1990年から中止されてしまった。

タマンは沖縄各地で漁獲され、フエフキダイ類で最も漁獲量の多い魚である。県栽培センターで種苗生産され、放流調査や養殖が行われている。糸満市の市魚にもなっている。

★サッコミーバイの大集合（八重山）

旧暦3月3日の前後約1週間

八重山ではサッコミーバイ（和名ナミハタ、沖縄方言はタクキューミーバイ）がこの時期に特定のサンゴ礁漁場（水深約10m）に集まってくるので、潜水器漁業や一本釣りでもとまって漁獲される。産卵のための大集合で、初めは雄が集まり、次いで雌が加わる。

★ユズーニバラの大集合（宮古）

4月上旬～6月中旬

宮古ではユズーニバラ（和名マダラハタ、沖縄方言はユダヤーミーバイ）がこの時期に八重干瀬（ヤビシ）の特定海域（水深約30m）にたくさん集まるので、主に一本釣りでもとまって漁獲される。ユズーニバラとは夜釣れるミーバイの意、バタダリニバラ（腹の大きいニバラ；ワタブーミーバイの意）と呼ばれることもある。

★ユダヤーミーバイの大集合（沖縄本島）

4月上旬～6月中旬

中城湾への水路である久高口（久高島の南）など、その他、あちこちでユダヤーミーバイの大集合があったが、近頃はほとんどなくなったという。産卵期に集まる親魚を取りすぎたのではないかと嘆く漁業者も多い。

★トビウオ

トビロープと称する浮敷網で数種のトビウオが漁獲される。漁期は2月頃から始まる。盛漁期は、石垣、糸満で4～5月、伊江島で5～7月。5月頃までは大型のトビウオが漁獲され、本土向け出荷も多いが、その後は小型トビウオ(プーカーやサガーマー)が多く魚価が安くなるため、漁期なかばで漁獲を中止することが多い。具志頭村の港川漁協では流し刺網の夜間操業で漁獲する。具志頭村の村魚はトビウオ。伊江島のトビウオ漁場では、釣りをする遊漁者が多くて漁業操業に支障が生じ、漁業者が迷惑している。

5 月

★モズク養殖

イトモズクの種(たね)採取 4～5月

水槽にイトモズクの藻体(母藻)と海水を入れて通気し、プラスチックの採苗板に種(遊走子)を付ける作業がこの時期に行われる。

遊走子はプラスチック板上で発芽して顕微鏡的な大きさの糸状体となる。これを低照度で継続培養して夏を越す。こうして越夏保存した糸状体から9～10月に今度は網へ種(接合子)付けを行い、新たなモズク養殖がスタートする。

★ウニ漁業

恩納村、久米島、八重山漁協などで5月1日開始、9月末日まで。

沖縄の有用ウニはシラヒゲウニ。水温の上昇につれて次第に身(実)が入る。漁期は初夏から夏。水温下降期の9月～11月に産卵して冬はやせる。寿命は2年。成熟親ウニの生殖巣を利用する漁業であるために、乱獲におち入りやすく、資源枯渇の危険性が大きい。

恩納村漁協では禁漁期(10～4月)の設定、漁獲サイズ(7cm以下は禁止)、漁獲量の制限、保護特別海域の設定等により、ウニ資源の保護、管理を行っている。

★クルマエビ養殖

種苗生産 5～6月

他府県から熟卵をもった親エビを購入してきて産卵させ、種苗生産を行う。生産した種苗は約30日間の中間育成後、養殖池に収容して養成し、20～25kgサイズになったら出荷する。

1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
				①種苗生産							
				②種苗の中間育成			③大型種苗の育成				
				④池手入れ		⑤種苗収容		⑥養成		⑦出荷始め	
⑧大型種苗追加放養				⑨出荷盛期							

図4 クルマエビ養殖の年間作業工程

★定置網漁業

定置網漁業は、15mより浅い海域に設置する小型定置網とそれ以深の大型定置網とがある。小型は第2種共同漁業権にもとづいて営まれるが、大型は定置漁業権が必要である。定置網の漁況は4月～7月を第1盛漁期、8～9月は不漁期（台風の影響が大きい）、10～11月は第2盛漁期、12～3月を不漁期とすることができる。

4～7月の主な漁獲物はグルクマ、シモフリアイゴ、カマス、メアジ（ガツン）、ヤマトミズン、ミズン、ツムブリ（ヤマトナガイユ）、ヒラアジ類（ガーラ）、タチウオ、ヒラソーダ（シブター）、ダツ（シジャー）等。

近年は、漁場汚染が進行して網の汚れがひどく、数日で網を洗わなければならない、漁獲量もガタ落ちしたと漁業者は嘆いている。中城湾では特にヤマトナガイユ、ガーラ、エーグラー、タチウオなどの漁獲が減ったという。

★エーグラーとカーエーの漁獲

4月～7月の頃、エーグラー（マーエー、和名はシモフリアイゴ）とカーエー（和名ゴマアイゴ）が定置網でまともって漁獲される。その大量漁獲の日は決まっていて、マーエーは旧暦4～8日、カーエーは旧暦8～13日の間に漁獲される。いずれも産卵行動にともなう移動中の大量入網である。初めは雄が多く漁獲され、次いで雌が加わる。

アイゴ類の漁獲量は8～11月には全体的に少なくなるが、冬期（12～3月）は籠漁業や刺網漁業による漁獲も加わって少し増えてくる。



図5 水揚げされたカーエー（定置網）

★ピークン

宮古島の東平安名崎で城辺町保良の人達は、旧5～6月の大潮時の夕方、東の沖合から上げ潮に乗って瀬の入り込みにやってくるピークン（ムロアジ）の産卵群を大量に漁獲した。しかしこの数年、不漁が続き、ピークン組合は1990年に解散した。

★クチナジ

銀葉でスミ★

和名はイソフエフキ。ナガンヌ島周辺など、あちこちで5～6月に底延縄によりまとまって漁獲されたが、近ごろはそのようなまとまった漁獲はほとんどないという。

★梅雨

5月中旬～6月下旬

沿岸では海が真っ赤ににぎり、これが沖縄の海かと悲しくなる季節だ。陸域からの赤土流出は漁業や観光にとって大きな問題となっている。この時期になると毎年のように、赤土対策の必要性を叫ぶ新聞記事が増えてくる。

元来、川は海に栄養分を運ぶ恵みの道であったが、今では赤土や農薬、生活排水、その他、いろいろなものが吐き出される公害の道になってしまった。

6 月

★三枚刺網漁業の禁止期間

6月1日～9月30日(沖縄県漁業調整規則第35条の2)

★ジャコガイ類の採捕禁止

6月1日～8月31日(「」第33条)

★ウミガメ類の採捕禁止

6月1日～7月31日(「」)

★ハーリー(糸満ではハーレー)

旧暦5月4日

漁業者の最も大事な海の祭典。航海の安全と大漁を祈願して各地で盛大に行われる。この頃、梅雨明け。



図6 ハーリー(港川漁協)

★モズク養殖

オキナワモズクの種（たね）採取は5～7月、水槽にオキナワモズクの藻体（母藻）と海水を入れて通気し、藻体から出てくる種（遊走子）をプラスチックの採苗板や水槽壁に付ける作業が行われる。

遊走子は発芽して顕微鏡的な大きさの盤状体となる。これを継続培養して越冬し、9～10月にこれから網への採苗（種付け：接合子付け）を行って、新たなモズク養殖がスタートする。

★ウミブドウ（海ぶどう）

繁茂期 6～10月

熱帯系の海藻で和名はクビレツタ。葉状部がぶどう状の房になっていて、そのかわいらしい形とすきとおるような緑色の清涼感が珍重される。グリーンキャビアの異名もある。

3月頃から10月頃まで活発に生長するが、11月以降は藻体が萎縮し、場所によっては消失する。主産地は宮古。養殖もされている。

★グルクン

タカサゴ類の総称。県魚としてなじみ深い。周年、一本釣りや追込み網で漁獲される。産卵期は3～6月。八重山のグルクン追込み網は資源保護のため3～5月を休漁。伊良部では10～5月にグルクン追込みを行い、夏はカツオ一本釣り漁業を行う。



図7 県魚のタカサゴ（カブグーグルクン）

グルクンは熱帯性の魚でリーフの外、水深30～50m付近で群泳する。数種のうち最も多く漁獲されるのは、体側の黄色い2本線と尾ひれ両端の黒斑が目印となるカブグーグルクン（和名タカサゴ）、尾ひれ両葉に黒い縦線が走るウーグルクン（クマササハナムロ）である。次いでやや大型のヒラーグルクン（ササムロ）が多い。

★ウニ漁業

北部地区の漁協で6月1日開始、9月末日まで。

シラヒゲウニの産卵期は9～11月。産卵期に受精した幼生は約30日間の浮遊生活の後、稚ウニになってイノー（礁池）の浅所に着底する。翌年10月までには6～7cmに成長してわずかながら産卵し、2年目の10月には8cmの成熟ウニとなって本格的な産卵を行う。寿命は2年。

★スクの来遊

旧暦6月1日ころの大潮の日、スクの大群が沖合から満潮時にリーフの中におし寄せる。まれに旧暦5月、7月の1日前後に来ることもある。

スクは、その大部分がハナブックラー（和名アミアイゴ）と呼ばれる小型のエーグラーの子供で、生後25日位たっていると考えられる。スクを塩漬にしたスクガラスは昔から県民に親しまれている。豆腐にスクガラスを添えると、この上ない泡盛の肴となる。

アミアイゴ成魚の漁獲量は少ない。

★タイワンガザミ

さし網やカニ籠で周年漁獲されるが、盛漁期は7～12月。県栽培センターで種苗生産され、与那城海域で種苗放流調査が行われている。

県下のカニ漁業は大部分がタイワンガザミであるが、その他にマングローブ河口域を主な漁場とするノコギリガザミ、水深50m位の砂質海域でとれるアサヒガニがある。

★漁船

沖縄県の漁船は約4,100隻（平成元年）。大きさ別には1～3トンがもっとも多く約45%、次いで1トン未満23%、船外機船18%、3～5トン8%、その他6%となっている。

沖縄の伝統的なサバニは軽くて波切りがよく、スピードが出やすいし、また復元力も大きいので舷側から漁獲物を引き入れるのに適した漁船であった。しかし船幅が狭いために船上の作業性や居住性に欠け、また魚探や航海計器、釣り機などの機器類の設置や漁獲物の鮮度保持のための船槽を作るにも不適であるから、近年では多くの漁船がFRP製の和船にきりかわっている。

3トン程度の新しい和船型漁船を建造するための費用は、ごく大ざっぱに言って、船体が450万円、エンジン650万円、機器類（魚探、自動航法装置、電話、釣り機、その他）450万円、合計1,500万円。

8月

8月

★モズク養殖

種（たね）の越夏保存 5～10月

採苗板に着生したオキナワモズク及びイトモズクの種（たね）を夏の間、継続的に培養して保

存する。イトモズクの種保存は、オキナワモズクよりも少し暗くした方がよいようだが、まだ技術的に不安定な部分が残されている。技術の早期確立が必要である。

★トビイカ漁業

漁期は7～11月、盛漁期9～10月。

本県周辺海域のトビイカ資源は大きく、多くの漁業者が伝統的なども釣り漁法で漁獲しているが、盛漁期になるとトビイカ価格が安くなりすぎるため、あまり熱心には獲らなくなる。需要拡大が課題。主産地は久米島、糸満、港川、知念、与那原、国頭。

旧暦15日前後の10Eほどは月夜のため漁獲はあまり良くない。

漁獲されたトビイカはすみで黒くなるためにヒンガーイカと呼ばれるが、肉質は美味。少し硬いのが欠点とされるが、知念漁協ではおばさん達が刺身用にきれいにこしらえて売っており、好評。刺身でもよいし、炒めてもよい。その他、高圧鍋で煮たり、バーナーの直火で焼いたり、新鮮なうちに開いて一夜干しにしたり……、トビイカのおいしい食べ方いろいろだ。

★底魚釣り漁業

タマン、ミーバイ、アカマチなどの底魚類は、一本釣りや底延え縄、底立て延縄等で周年漁獲される。近年は底魚資源の減少が目立ち、特にミーバイ（ハタ類）やヤキータマン（和名アマミフエフキ）、アカマチ（ハマダイ）などの減少がひどいという。

★台風の来襲

沖縄県に近づく台風は1年間に平均7.6個。8月に最も多く、次いで9月、7月の順になっている。8月の台風は進行速度の遅い迷走型になり易く、また9月には最大級の台風が多い。そのため例年8～9月は漁業者の出漁できる日が減り、漁獲量は落ち込むことが多い。



図8 底はえ縄漁業の漁獲物

★出漁日数

漁業者が出漁できるかどうかは天候に大きく左右される。また、船の大きさや漁業種類によっても変わってくる。統計資料によると、5トン未満漁船の平成元年の出漁日数は、一本釣り53日、底はえ縄62日、ひき縄（ほとんどパヤオ漁業）82日であるが、これは兼業の漁業者を含む平均値である。

糸満の海人で、2.25トンの船で1人操業により底はえ縄漁業を専業にしている人の話によると、この人の過去10年間を平均すると、年間の出漁日数は157日であったという。それは他の人に比べるとどうですかとたずねたら、人並みかちょっとだけ多いかなという感想であった。パヤオ漁業では出漁できる日が底はえ縄漁業や一本釣り漁業より多くなり、180日前後が普通らしいが、それでも200日以上の出漁は特別な人だという。

★漁業者数

沖縄県の漁業者は何人かとよく聞かれるが、漁業者とはどんな人をいうのだろうか。年間に何日ぐらい漁業をすれば漁業者と呼ばれるのか。

統計資料では、海面漁業の海上作業に年間30日以上従事した人を漁業就業者と言い、その数は5,760人（平成元年）となっている。一方、県下35漁協の組合員は約8,600人で、そのうち、正組合員（漁業に従事した日が年間90日以上に達することが資格要件の一つとされている）は約4,600人である。

漁業者数は次第に減少し、また漁業者の高齢化が進行している状況にあるため、漁業後継者の育成が重要な課題となっている。後継者育成のためにも、現在の漁業者が喜びを感じつつ、いきいきと生活できるような漁業を実現することがもっとも重要である。

9 月

★ヒトエグサ（アーサ）の養殖

天然採苗 9月下旬～10月

ヒトエグサの人工採苗技術はまだ確立されていないので、養殖網への種付けは、天然のヒトエグサが毎年よく繁茂してくる海岸で約20日間、網を張って行う。この天然採苗が成功するかどうかは、網を張る高さ、場所、時期の3点が適切かどうかにかかっている。

★モズク養殖

採苗（養殖網への種付け） 9～10月

陸上水槽で、越夏保存した盤状体（オキナワモズク）または糸状体（イトモズク）から養殖網に種（接合子）を付け、これを海に出してモズク養殖がスタートする。

高水温・長日の夏期を顕微鏡的な大きさで過ごしたモズクは、低水温（25℃以下）、短日の時期になってようやく大型藻体へと変身する。

★シャコガイ

沖縄でアジケー、宮古でニゴー、八重山でギーラと呼ぶ。
沖縄県には数種のシャコガイがいるが、いずれも体の中で単細胞藻類が繁殖し、それがシャコガイの栄養源となるので、外部から餌を取る必要はない。その代わり光りのよくとどく清澄な浅海にしか生息できず、文字どおり逃げも隠れもできないので、シャコガイ資源は漁場汚染や乱獲にきわめて弱い。
またシャコガイ類は雌雄同体であるが、小さい個体はすべて雄で、数年を経た大型個体のみに雌の機能が出現するので、この点から言っても乱獲に弱い特性をもっている。
沖縄県沿岸におけるシャコガイ資源の減少はすでに顕著である。そのため県漁業調整規則で採捕禁止期間（6月1日～8月31日）の設定や、小型個体（ヒメジャコでは8 cm以下）の採取を禁止したりしている。
ヒメジャコ、ヒレジャコなどの種苗生産が水試八重山支場で行われ、種苗放流も各地で行われている。



図9 ヒメジャコの殻付き出荷

10月

10月

★モズク養殖

中間育苗 10～11月

陸上水槽で種付けした養殖網を5枚ずつ重ねて海へ出し、適当な場所（苗床）で、網を海底に接地してゆるめに張る。やがてモズクは芽を出し、約30日後1 cmの藻体に成長する。これが中間育苗である。

中間育苗はモズクの芽出しを良くし、丈夫な藻体に育てる効果があるとされ、モズク養殖の重

要な工程の一つになっている。長くやり過ぎても具合は良くないようだ。

中間育苗後、網を養殖場に移して今度は1枚ずつ海底から30~40cm離して張りなおし(本張り)、収穫まで養殖する。

★定置網漁業

第2盛漁期 10~11月。第1盛漁期は4~7月。

10~11月の主な漁獲物は、グルクマ、メアジ、タチウオ、ミズン、ヤマトミズン、ムロアジ等。この時期(秋)のグルクマ、メアジ、タチウオ等は小型群が多く、春~夏生まれの0才魚(当才魚)とされている。

定置網の漁獲量は1986年以降、年を追って減っている状況である。

★アオリイカ

漁期は9~5月

産卵盛期は2~4月。海草(藻)やサンゴ石などにエンドウ豆のさや状の白い卵塊を産みつける。

漁業者はアオリイカを白イカと赤イカに区別している。白イカはリーフの内側にいて主に定置網や曳き縄の餌木で漁獲する。赤イカはリーフの外縁又は島嶼間の水深20~50mの曾根を漁場として同様に曳き縄の餌木で漁獲する。白イカより赤イカの方が大きい。旧暦8月15日、中秋の名月の頃から漁期が始まり、秋冬期を中心に5月頃まで続く。7~22日頃の月夜によく釣れる。

アオリイカのすみ汁は、昔から下げ薬(さぎぐすい)として県民に広く親しまれている。近年では県内需要を満たすため、鹿児島県などからの移入だけでなく、外国からの輸入も行われている。

11 月

★ヒトエグサ養殖

本張り作業 10~11月

種付け場で天然採苗した網を養殖場に移してゆるめに張りなおす。ヒトエグサの生育や雑藻防除のために干出時間の調節が重要で、網を張る高さに気をつける。

★モズク養殖

本張り作業 10~12月

中間育苗したモズク網を養殖場に移し、海底から40cm離して1枚ずつ張り直す。

★マンビカー

マンビキまたはフヌイユとも呼ばれる。和名はシイラ。主に曳き縄で漁獲され、盛漁期は4~6月と11月。成長は非常に早く、500gの幼魚が9カ月で16kgになったという。秋以降のシイラは脂がのって刺身でもおいしい。塩乾品も珍重され、国頭村や波名喜村では特産品となっている。7、8月には産卵し、刺身の味は落ちるが、フィッシュフライやバター焼きにすると良い。

★シマアジ

（イ）ガウラの仲間で高級魚とされている。水深40～90mの海域で一本釣りや底延縄で漁獲されるが、漁獲量は少ない。漁期は糸満沖で11～12月の1カ月程度、名護湾で冬期（12～3月）。当歳魚は5～7月に内湾の定置網に入ることがある。

県栽培漁業センターで種苗生産研究と放流及び養殖試験が行われている。

12 月

★モズク養殖

イトモズクの藻体採苗 11～1月

オキナワモズクの藻体採苗 12～3月

モズクは小さい藻体でも種（たね：中性遊走子）を出すので、藻体採苗（藻体から養殖網に種付けすること）が容易にできる。モズク養殖ではこの特性を利用して、まず9月下旬～10月に、

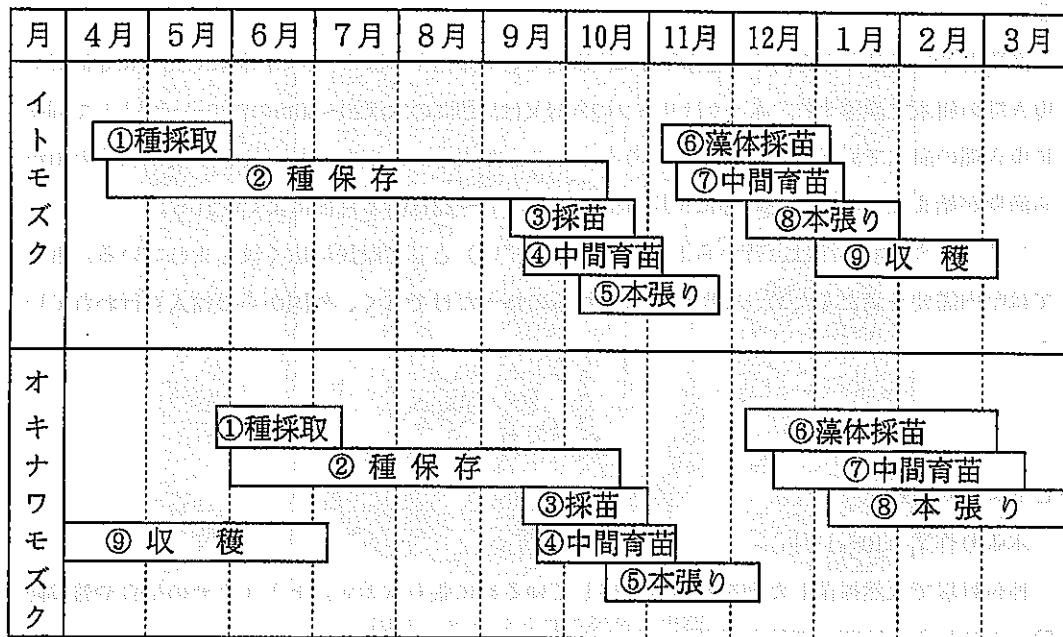


図10 モズク養殖の年間作業工程

越冬保存した配偶体（盤状体または糸状体）から採苗（接合子を網に付ける）して第1回目の養殖を行い、これによって得られるモズク藻体を母藻として11～12月以降、今度は藻体採苗によりたくさんの網に中性遊走子を種付けして本格的な養殖を行っている。

藻体採苗後、海に出してから第1回目収穫までの期間は、イトモズクで60日（中間育苗30日、本張り30日）、オキナワモズクで100日（中間育苗30日、本張り70日）位である。1枚の養殖網から2回モズクを採取、オキナワモズクは計140kg、イトモズクは計100kgほどの収穫量となる。

★ヒトエグサ養殖

収穫時期 12月下旬～4月上旬

1シーズンに2回の摘採を行い、1網から計60kg位（湿重）のアーサを収穫する。

★クルマエビ養殖

出荷時期 11～6月。盛期は12月と4～5月。

7月に種苗を入れて養殖し、20～25gサイズで出荷する。近年は台湾の養殖クルマエビとの競争が強くなり、その対策として出荷時期の延長や出荷サイズの大型化などの努力が始まっている。

★ヒンガーガーラ

12～2月に底延縄や一本釣りですとまって漁獲される。和名はインドオキアジ。体色が黒っぽいためにヒンガーと名付けられたが、おいしい魚である。

主な参考文献

- (1) 沖縄県水産試験場事業報告書。昭和60、63、平成元年度版。
- (2) 沖縄県水産業改良普及所。各年度普及活動実績報告書及び各種普及資料。
- (3) 本永文彦（1990）。沖縄県パヤオ利用漁業における主要魚種の漁況の経過（1985～1988）。南西外海の資源・海洋研究 第6号。
- (4) 本永文彦（1991）。沖縄島におけるシモフリアイゴの産卵期の体長組成と成熟度と性比。南西外海の資源・海洋研究 第7号。
- (5) 杉山昭博等（1990）。石垣島におけるアイゴ類成魚の漁獲変動と稚魚の季節的来遊。水産増殖38巻11号。
- (6) 伊志嶺安進（1987）。「沖縄気象歳時記」。ひるぎ社。
- (7) 県水産試験場編（1986）。「沖縄県の漁具漁法」。(財)沖縄県漁業振興基金発刊。